事例01 大磯・もあなこびとのこや（NPO法人もあなキッズ自然楽校）

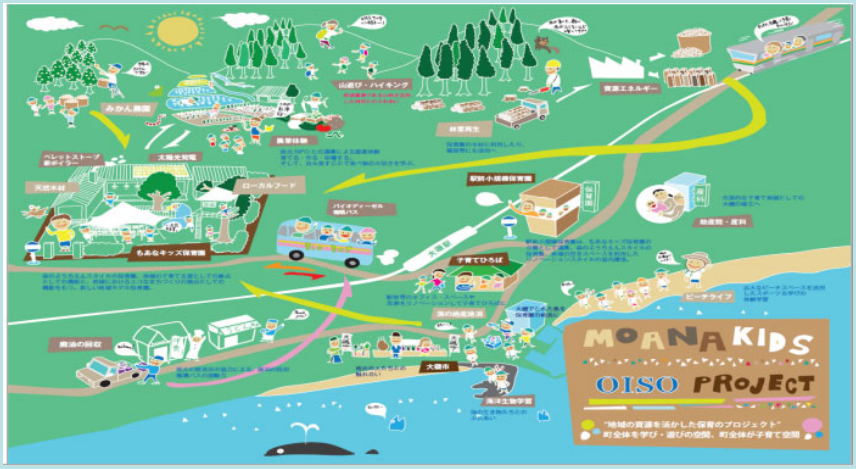
法人・事業概要

法人名 園名	大磯・もあなこびとのこや （NPO法人もあなキッズ自然楽校）
所在地	神奈川県大磯町
特徴	＃自然や文化を活用 ＃ありたいまちのデザイン

Point

NPO法人もあなキッズ自然楽校では、地域と連携しながらあるべきまちの機能を描いたうえで、コワーキングスペースの隣接等の地域との連携を深めながらあるべきに近づいている。

地域丸ごと全てを保育に活用。自然体験活動を重視し、「森のようちえん型」の保育園、学童保育の運営を通し、こどもたちの生きる力を育む。郵便局の遊休資産を用い、地元の古材等を活用した園舎で、街の財産を継承。保育園横のコワーキングスペースとともに、ローカルエリアの新しいライフスタイルを発信する拠点として新しい保育モデルのあり方を発信している。



法人概要・取組年表

2007年	NPO法人もあなキッズ自然楽校 設立
2015年	大磯・もあなこびとのこや　設立
2021年	大磯郵便局の遊休資産を活用した園舎に移転。

認可小規模保育園　0歳児～2歳児 定員12名

横浜市にて認可保育園、認可外保育所、横浜認証保育園、放課後児童クラブを運営。茅ケ崎市で企業主導型保育所、小田原市で認可小規模保育所を運営。

背景・使っているリソース

地域の既存施設をまるごと有効活用。外を歩き回る中で形成された地域交流の輪を活かす。

小規模認可保育所開設時に、保育所ができることでの地域効果（単に保育所というだけではなく、地域に根差した行政との連携施設をめざしていること）について、ビジョンをマップ化し町に説明、開園に至った。

小規模保育園のため、園庭はないが豊かな大磯の自然（海、山が近い）、地域の歴史や文化、産業に触れることを日々実践。外を歩き回る中で形成された地域交流の輪をいかし、お寺訪問、乗船体験、餅つきなど、地域ぐるみでの子育て支援が実現している。

保育の体制面については苦労しているところはなく、人材は量・質ともに十分確保できている。理念に共感した質の高い方を採用できている。パートタイムについては、ローカル採用しており、年配で地域をよく知る方に来ていただき、我々の知らないことを逆に教えていただくなど、１人１人がうまく機能している。

地域との関わり

遊休資産を活用した園舎、コワーキングスペース併設の設計により、地域活性に貢献。

遊休資産となっていた大磯郵便局一部の使用を提案され、設立当初の小さな雑居ビルから現在の場所に移転した。建物をリノベーションするにあたっては「古きよきものを継承する木育」の観点から、極力税金を使わず、かつ地域活性にも貢献するため、地元木材やリノベーションの部材を使用。

開園当初から同じビルの２階にいた株式会社co.labo（シェアオフィス、NPO法人「西湘をあそぶ会」、コミュニティ農園の運営など、まちのプレイヤーの１人）とも連携し、同建物内でコワーキングスペース（「Post-CoWork」）を運営してもらい、保育園の隣に働く場がある環境を整備した。デンマークで学んだヒュッゲをヒントに、働き方、ライフスタイル全般の意識改革をしていきたいと考えている。コワーキングスペースの併設による時間の有効活用だけでなく、例えばPost-CoWorkでは、利用する人々の間で農園の共同運営やスポーツ活動、ビール作りなど、ここを起点とした様々な新しい地域コミュニティ、地域づくりの事業が生まれつつあり、この場所が地域の活性化につながっている。

取組による変化

子どもたちとの日々のふれあいにより、町が元気に。卒園児や保護者の自発性も促進。

子どもたちとの日々のふれあいにより、高齢化が進んだ大磯町が元気になり、高齢者の笑顔につながったことが1番の大きな成果。

横浜では学童も運営しており、保育園のシステムを超えて子どもの成長を一貫して見守っている。卒園生では既に大学生になった子どももいるが、環境保護団体を自ら立ち上げ活動している子もいる。保護者との関係も良好で、OB・OGの保護者の中にはその後パートで働いている方、自分たちでNPOを立ち上げ地域活動している方々などもいる。一般的な保護者のための活動（お遊戯会など）を一切しないことにより、保護者の自発性を誘導している。あくまで、場・環境を提供するというスタンスでいる。10年後、どの保育園も質の高い、「選ばれる保育所」になっている仕組みづくりが必要。そのために我々は小さくてもいいから、その土地、ローカルの良さを活かした実践を継続しモデルケースを作っていきたい。

事例02 カミヤト凸凹保育園（社会福祉法人愛川舜寿会）

法人・事業概要

法人名 園名	カミヤト凸凹保育園 （社会福祉法人愛川舜寿会）
所在地	神奈川県　厚木市
特徴	＃インクルーシブ保育 ＃地域に根差した保育園

Point

社会福祉法人愛川舜寿会では、高齢者施設・就労支援事業・インクルーシブ等様々な「人」と繋がる機会を設けつつ、そこにこども達や職員自身が主体的にかかわっていく仕組みを構築。

凸凹保育園のコンセプトは「誰もが持つ『凸』に注目し、誰もが持つ『凹』をみんなで埋め合う」というもの。カミヤト凸凹保育園には、同じ園舎内に障害児通所支援事業「カミヤト凸凹文化教室」があり、重要な人格形成期において、０歳から１８歳までの子どもたちが存在を認め合い、共に遊び、相互に響き合う保育環境であることを大切に考えている。

どの年齢の子どももどこに行って過ごしてもよく、１日中好きなところで好きな人と好きな遊びを続けられる場となっている。園の建物の中で、障害児通所支援事業の子どもたちと保育園の子どもたちとが一緒に散歩や活動をし、一緒に給食も食べて、一緒にお昼寝をして、生き生きと過ごしている。

法人概要・取組年表

1992年	社会福祉法人愛川舜寿会設立
2019年	カミヤト凸凹保育園 設立

カミヤト凸凹保育園	定員90名
カミヤト凸凹文化教室	定員10名/日

法人の理念は、共 生・寛 容・自 律。特別養護老人ホーム等の高齢者福祉関連事業、障害福祉サービス事業も展開。

背景・使っているリソース

開園当初からインクルーシブ保育。子ども及び職員の自主性を尊重し、発揮できる環境を整備

運営法人は、愛川町にて30年以上、特別養護老人ホームを運営してきた。市とやり取りし保育所を設立することになった際、地域に根差した保育園を目指し、広々とした開放的な環境で子どもを育てたいと思った。過疎化が進む地域にこそ、子どもの存在が必要ではないか、散歩で子どもの声が聞こえたら高齢者含め地域の方々も嬉しいと思い、一番高齢化が高い地域を選んだ。高齢化や少子化などをミクロな視点で解決していくのではなく、マクロ的に越境して考え、社会変革していく意味もある。

開園当初から障害児を受け入れてきた。園での活動は全ての子どもが一緒に活動。園は部屋全てが繋がっており、隣のクラスで何をやっているのか気配で伝わるような作りとなっている。全園児、どの保育室に行っても良い。

職員の自主性も重んじており、自ら動くスタッフに育ち、声を上げやすい風通しの良い風土が育っている。

地域との関わり

就労支援事業所の方や地域の高齢者との交流

園の周辺はもともと原っぱで、少し行くと歴史的な地域が広がっているため、地域の方と交流して助けてもらおうというのが当初からのコンセプトである。壁や敷居がない開放的な園は、外から見ても何をしているところなのかが分かり安く、何もしなくても地元の方との触れ合いは増える。それだけでなく、できるだけ地域の方との交流が積極的に行われるようしかけもたくさん作ってきた。自然と地域との交流の輪が広がり関係性が深まっていっている。

例えば、地域の工務店に子どもたちが遊んで座れるベンチの制作等を依頼し、地域の人も散歩途中に利用できる。夏祭りに老人ホームの高齢者を招待したり、ハロウィンに近所の家をまわったり、田植え等を地域の人と実施したりしている。地域で盛んな養豚場に遊びに行ったり、神社とも交流が深く境内で遊ばせてもらっている。

法人が運営する地域共生文化拠点から就労支援の利用者に週3回、園の掃除に来てもらっており、子どもたちは様々な大人とも触れ合うことで自然と高いコミュニケーション能力を身に着けている。

取組による変化

保育園と児童発達支援の子どもたちが一緒に過ごし自発性の育成、保護者にも好影響

自由度が高いことは、自発性を育てることにもつながっている。

保育園のこどもたちと児童発達支援の子どもたちが一緒に過ごし仲良しになることで、双方の保護者も非常に仲良く交流しており、一緒に過ごすことの意味を感じている。入園当初は切実感があった保護者の方が、こどもの明るい成長、その他の親とのかかわりによりみるみる表情が明るくなり、ここで子どもが育ってよかったと感じて頂けているのを見ると、更に繋げる・広げていく意味を感じている。

事例03 基山モール商店街、ちびはる保育園基山園

法人・事業概要

法人名 園名	基山モール商店街、 ちびはる保育園基山園
所在地	佐賀県三養基郡基山町
特徴	＃商店街の活性化 ＃地域に根差した保育園

Point

商店街の中にある保育園。エリアとして保育機能を担うことにで様々なシナジーを創出。

商店街側の「持続可能なまちづくり」構想と、町側の商店街の空き店舗を活用し保育園を設置する構想から、商店街の中に保育園が移転してきた。

商店街の歩行者天国「グリーンロード」の一部が、子どもたちの遊ぶ場所として利用されている。こどもたちを商店街の人々が見守り、支えるとともに商店街と保護者との新たな交流も生まれている。商店街に活気が出て、商店街の空き店舗減少にもつながっている。

グリーンロードは2018年2月の佐賀県県民だより「さががすき。」表紙にも

法人概要・取組年表

2016年 ちびはる保育園基山園 モール内に移転

3歳児～認可外保育所

0～2歳児小規模保育施設

合計定員39名

ちびはる保育園運営法人は、保育所事業のみ実施。
基山モール商店街は、昭和56年設立の駅徒歩1分の好立地の駅前商店街。毎年7月に「きのくに祭り」が盛大に行われ、子どもたちが多く参加。

背景・使っているリソース

存続の危機意識からまちづくりに注力してきた商店街に立地し、地域が子どもを見守る環境にある。

基山モールはJR基山駅前の再開発等により昭和57年に整備された商店街。近年シャッター街となり、危機感を覚え、「補助金に頼らない、持続可能なまちづくり」を考えはじめた。

ちびはる保育園が開園する１年ほど前、交流の拠点となる「街中公民館」を商店街の中に設置しサークル活動の場や無料休憩所として開放した他、小学生向けの将棋教室や地域住民の写真展の会場として使用するなど買い物をするだけではなく地域住民が集い交流する場として動きはじめた。

同じころ、町のこども課が中心となって、商店街の空き店舗を活用し保育園を設置する構想で、元々他の場所にあったちびはる保育園が2016年に移転してきた。その際、経済産業省の補助金を活用した。小さい町のため、役場の動きもスムーズで早かった。

このような背景があり、基山モール商店街の中に保育園を設置する際には、商店街がとてもウエルカムに迎えてくれた。

地域との関わり

商店街の中の道が、園児の遊び場。日常の中で商店街と保育園が交流。

保育園で商店街の手書きmapを作成（ちびはる限定お得マップ）、ちびはる特製カレンダー（子どもたちがクレヨンで描いた絵がプリントされている）を作成し、商店街への配布を行った。商店街からはそのお返しとして買い物特典カードをプレゼントするなど、ちびはる保育園を起点とした積極的な交流が行われている。

商店街の歩行者専用道路（グリーンロード）をイベント開催場所として使用することで交流の場となっている。ちびはる保育園のこどもたちがチョークで自由にお絵描きできる道のキャンバスにもなっており、日中は子どもが自由にお絵描きを楽しみ、歩行するお客さんは、日々変化するかわいい絵を見ながら通路を歩く。みんなにとって楽しい空間となっている。商店街が寂しくならないように、子どもたちの声も響かせてほしいし、道路にもいっぱいチョークでお絵描きしてほしいというふうに、商店街のほうから言っていただけている。保育園としても、独自開催のイベントだけでなく商店街イベントに参加することができるのはメリットになっている。

取組による変化

保護者や卒園生と商店街の交流にもなり、地域コミュニティの活性化につながっている

こどもたちを商店街の人々が見守り、支えるとともに商店街と保護者との新たな交流も生まれている。商店街に、精神的な面でプラスになっている。

夏祭りの際、こども用の山車をちびはる保育園の園児にもかついでもらうことで、地域文化の継承に参加・地域との交流を図っている。夏祭りの山車の参加人数を見ると、基山商店街モールの参加者数が軍を抜いて多く（他地域の倍以上）、こういった地域交流の取組の成果と感じている。

商店街としても、10年前まで10店舗ほどあった空店舗が、現在は２店舗のみの空きになり、病院、高齢者・障碍者施設、塾、ダンス教室など、多世代が集まる商店街になっている。商店街そのものに常に人が集まっている状況を作る・持続させることが重要と考えている。

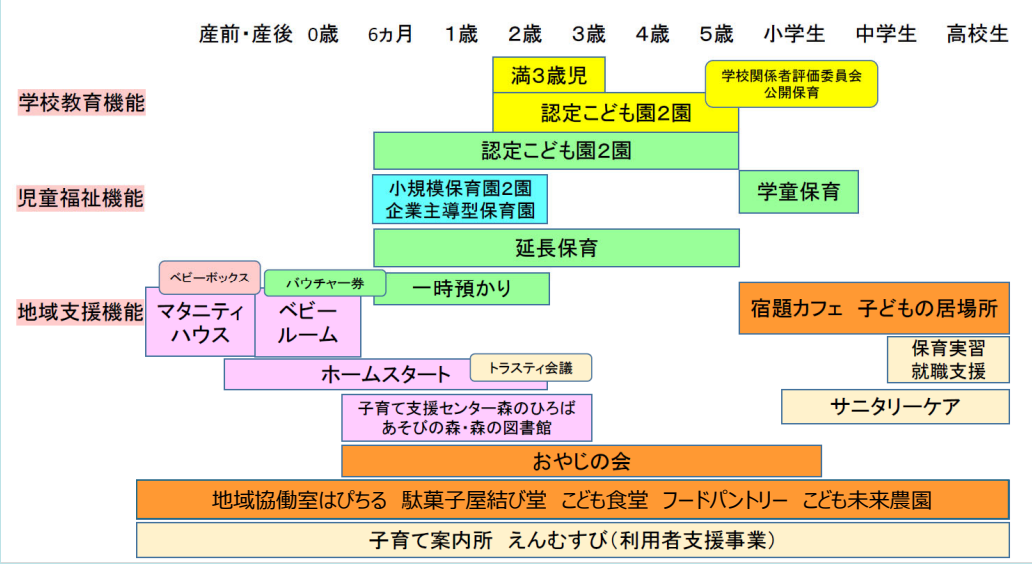
事例04 認定こども園こどもむら（学校法人　柿沼学園）

法人・事業概要

法人名 園名	認定こども園　こどもむら（学校法人）
所在地	埼玉県　久喜市
特徴	＃「むら」ごとつくりだす ＃妊娠期からの支援

Point

認定こども園の運営の他に、以下の通り地域のこども、子育て家庭に係る多様な事業を展開。園名の「こどもむら」が示す通り、**必要なコト・モノがそろった「むら」のような地域を創りだすことを目指している。**



取組年表

1975年4月	学校法人柿沼学園／栗橋さくら幼稚園設立認可
2012年4月	認定こども園こどもむら設立　認定さくらのもり保育園 設置認可
2012年7月	子育て支援センター「森のひろば」設置
2017年4月	こどもむら学童クラブ en-college 設立
2019年9月	こどもむら寺子屋はぴちる 開設
2020年6月	学習支援事業 開始
2020年8月	産前産後ケア事業開始
2023年4月	養育支援訪問事業、子育て世帯訪問支援事業開始

背景・使っているリソース

地域の行政、企業との連携によりサポートを充実

1975年から久喜市（当時は栗橋町）に幼稚園を運営。その後、認定こども辺への移行、新園の設置などを経て約450名の規模（5施設合計）で保育施設を運営し、同じ地域で他の事業も行っている。

市の人口が減る中で、「こどもを生み育てやすい環境を整えれば、大規模開発等に頼らなくてもこどもの数が増えるかもしれない」という仮説を立て、園を置いている伊坂地区に限定して、こどもと家庭に必要な機能を一つずつ揃えてきた結果が今の姿である。まずは自主事業で取り掛かり、その後公的な補助金や制度を積極的に活用し、自治体と連携し、受託事業の形をとったりすることで、様々な機能の展開を実現した。

連携の例の一つがベビーボックス配布である。数年前、産後の大変な忙しい時期に受けられる自ら支援を探し、自ら支援を受けに行くことはハードルが高いのではないかと考えたことから、妊産婦へのベビーボックス配布（新生児期に必要なケア用品のセット）を、産前から支援につながってもらうための工夫として企画。企業からの協賛を得てボックスの中身の充実も実現した。また、案内の配布は保健センターで母子手帳の配布時に行ってもらうことで公的な要素を含ませた。それにより、多くの妊産婦に届けることができるようになっている。

地域との関わり

あらゆる年齢層の地域住民の接点が生まれる居場所へ

事業全体を通じて、こどもと家庭を見守り、支える「地域づくり」を重視している。例えば、就園期間以外にもこどもや家庭とつながるものとしてカフェ、駄菓子屋、子育て案内所、フードパントリー、農園などを運営しているが、これらの場所は自然と様々な子育ての段階、年齢層の人々の居場所となり、そこで地域住民のコミュニケーションが生まれている。そしてこうした居場所は、支援が必要なこどもや家庭を把握し、地域の支援につなげていく入口としても機能するようになりつつある。

また、施設での生活や保育期間に限らず地域の人々との接点を持つようになることが当たり前になってきた結果、今では在園児に限らず保護者OBや、近隣の住民の方々がこども園の活動にボランティア参加してくれたり、自治会と連携して地域のイベントを運営してくるようになっている。

園運営とその他事業、地域の活動は別々のものではなく、一体となって子どもを産み育てやすい地域をつくり出すものとして存在するようになっている。

取組による変化

地域のこどもの数に変化

地域の子育てサポートのニーズに耳を傾け、新しい取り組みを一つ始めると、そこからまた新しく地域のニーズを把握することができ、次の事業につながっていくというサイクルができることが実践を通じた学びと言える。

また、保育だけでなく、相談事業や食に係る事業（農業、子ども食堂、カフェ等）、学習サポートなど様々な分野をカバーすることで、法人内はもちろん、地域に住む様々な専門性やバックグラウンドを持つ人たちに関与、活躍してもらえるようになったこともよい変化として顕在化している。

「我々の取り組みだけの効果とは断言できませんが、伊坂地区ではこどもの数が増加している傾向があります。こどもを生み育てやすい地域として魅力を感じていただけるのであればうれしい限りです。」 法人理事長の柿沼氏は語っている。

事例05 せせらぎ保育園/子育て支援café　FOYER（社会福祉法人清朗会）

法人・事業概要

法人名 園名	せせらぎ保育園 （社会福祉法人清朗会）
所在地	東京都清瀬市
特徴	＃こどもがいても、いなくても立ち寄れる場所　＃小学生の居場所　＃子どもと大人のやりたいが叶う場所　＃やりたいとやりたいが繋がる場所

Point

東京都の市部にある認可保育所。こどもの主体性を尊重する保育を実現するため、保育環境づくりにも工夫を凝らしている（一斉保育ではなく自分のやりたい遊びをやりたいときにやる、食事、睡眠も個のペースを優先できるよう、人員配置を工夫する ）。異年齢保育、周囲の豊かな自然環境を活用した保育などにも取り組む。

さらに、「こども主体」「こども真ん中」な地域社会を創っていくための取り組みとして、2019年、園に隣接する土地に「子育て支援café　ホワイエ」を設置。親子がゆっくり一息つける場所、として運営を開始。、2023年からは「誰もが集えるFOYER（居場所）」を目指し、年齢制限を撤廃。未就学児親子だけでなく、小学生や、育児未経験の学生もふらっと立ち寄り、居場所を得られる空間を目指している。

法人概要・取組年表

2014年	法人設立、せせらぎ保育園設置
2019年	子育て支援café　FOYER　設置
せせらぎ保育園	定員名125名
子育て支援café FOYER	月～金オープン、通常16時まで、火曜・木曜は18時まで

Café FOYERは小学生が利用しやすいよう、オープン時間を延長（現在は火曜/木曜）、今後

背景・使っているリソース

「こども中心」を実現できる保育ノウハウを生かした居場所づくり

せせらぎ保育園では保育所の運営方針として、「十分な養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図る」ことを重視してきた。

この考え方を在園児だけでなく、卒園児、卒園児だけでなく地域のこども、地域のこどもにも適用した結果が「誰もが集えるFOYER（居場所）」である。当初は主に未就園児の親子向けの支援センターとしてスタートし、現在では親子向けの支援（遊び場、お散歩会など）と、夕方以降の小学生の居場所、両方の機能を果たしている。

Café FOYERの運営にあたっては、保育所という場所、保育士等の人材はもちろんこと、「こどもファースト」の活動のノウハウを蓄積してきたことが最も大きなカギとなっている。当園では開園当初より、一斉保育ではなく「こどもがしたいときにしたいことをできる環境を整える」、ことを重視しており、遊びの時間、午睡の時間、食事の時間などを可能な限り希望に合わせているほか、形式通りの運動会や発表会は廃止し、子どもたちが発案し、企画したイベントを行っている。

こどもがやりたいことを主張し、実行できる環境づくりを行ってきたノウハウが、こども中心の居場所づくりにも生きていると言える。

地域との関わり

こどもや、保護者だけでなく必要としている人すべての居場所に

子育て支援を行うにあたり、当初は将来的には入園を検討している親子に、安心できる居場所を提供し、当園の良さを分かってもらいたいという考えもあった。しかし、子育て支援をつづけていく中で、居場所が必要なのは、未就園児だけではないという考えに至り、年齢制限を撤廃した結果、小学生も含め様々な年齢層の人々が交流する場になりつつある。

従来、こどもがいない若い層や、こどもが巣立った層にとって、保育所は接点を持ちづらい場所だが、「ふらっと寄れる場所」、「誰でも参加できるイベントがある場所」を園の隣に置くことで、当園がどんな場所なのか、こどもを真ん中にした居場所とはどんな場所なのか、が地域の人にも理解されやすくなっている。実際に、アトリエデーや映画上映会などのイベントには、多くの地域住民が訪れ、園とFOYER、地域の交流が活発になりつつあると言える。

取組による変化

「保育業務」を担う人から、「こども真ん中社会」を支える人という自己認識へ

様々な年齢層の人々が集まり、地域の人たちとの交流が増えたことにより、地域の子どもたちや家庭がどんなサポートを必要としているのかを把握しやすくなりつつある。

また、従来から職員は「子ども主体の保育」に取り組んできたが、子育て支援を実践することにより、「すべてのこどもを真ん中に置いた居場所としての保育所や子育て支援のあり方」について、保育所運営業務の域を超えて考えるようになり、その役割を自分たちが担うという誇りを持つことにもつながっている。

こうした取り組みに共感する若者が保育所での就業を希望してくれることも増えており、より多様な人材の確保、活躍にもつながっている。

事例06 地域まるごと子育て縁（株式会社CNC）

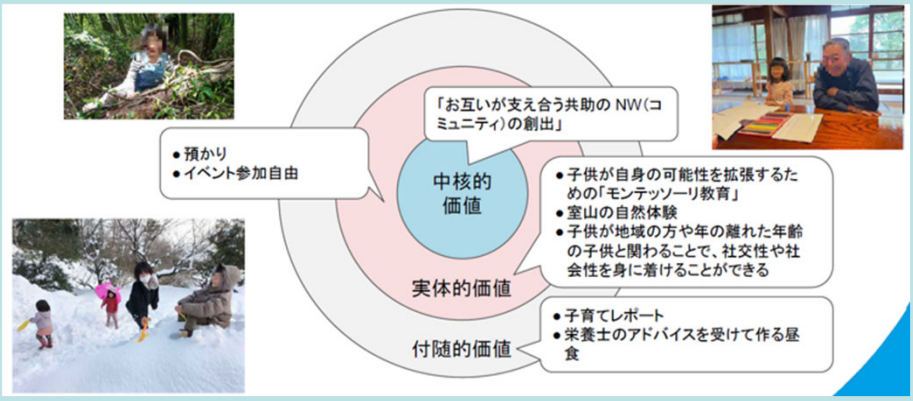
法人・事業概要

法人名 園名	地域まるごと子育て縁 （株式会社CNC）
所在地	島根県雲南市
特徴	＃共助　＃地域コミュニティ活性化 ＃地域まるごと子育て

Point

地域まるごと子育て縁では、地域みんなでこどもを見守り育てていくことを目指した仕組みづくりを実施。食の杜という、自然とともに生きることを大切にしている事業者が集まっている複合施設内に立地し、多世代の地域交流の拠点として室内あそび、地域の方々との触れ合いによる体験・イベント・キャンプなどを行っている事業である。

今までの子育ては公助や自助で賄っているモデルだったが、共助にも広げ、助け合いながら子どもを育てていくという新しい子育ての形に挑戦。そのような在り方が未来の子育ての当たり前となり、子育てによって、豊かな未来をつくり出していきたいと考えている。



法人概要・取組年表

2017年　Community Nurse Company 株式会社（現　株式会社CNC）設立

2022年　地域まるごと子育て縁　運営開始

定員5名。毎週金～日で拠点を開放し、プログラム提供。
法人としては、誰もが誰かの元気を応援し合う「コミュニティナーシング」の社会実装を目指し、雲南市をはじめ全国各地で展開中。「コミュニティナーシング」とは、目の前の人の健康を気遣うような声かけや、おせっかいによる相互扶助の促進など、関わり方や実践の在り方のことを指し、パートナー企業や自治体とともに持続可能なモデル開発に取り組んでいる。

背景・使っているリソース

有事の際に必要となる地域の中で相互に助け合えるつながりを提供。

実施内容は、①杜のクラス：未就学対象、②その他シーズンキャンプの開催（3才以上対象）、③コーヒー会・懇親会（杜のクラスに来た子どもの親御さんに集まってもらい、親同士のネットワークを形成していもらうしかけ）を中心としつつ、それらを通して地域住民が接点を持つきっかけを提供し、関係構築を促している。

活動エリアとしては、杜のクラスについては、雲南市内の古民家を使用し未就学児向けで行っている。

サマーキャンプについては対象年齢層が上がるため、お隣の出雲市、県外（広島県）等地域外の方にも参加いただいている。

子どもが１人で遊びに来るという、いわゆる一般的な一時預かりもしているし、親子で遊びに来ることができるようなイベントの企画・運営もしている。人員体制として、企画と現場を行き来してはいるが、5名（企画3名、現場2名）で運営している。現場2名のうち１名は保育士資格を持つスタッフ、もう１名は会社の正規社員が入れ替わりで対応している。

地域との関わり

地域住民と子育て家庭が直接つながっているという状態を目指す。

月１のイベントに、地域の方に講師として来てもらっている。（例：家にこもりがちだった80代のおじいちゃんに、子どもたちに竹水鉄砲の作り方を教えてもらうようお願いしたところ非常に喜んでくれた。家に引きこもりがちなご老人に外に出てもらい、同時に子どもの親も含め、地域の方と顔見知りになるきっかけを作っている。一度顔見知りになるとその後も関係が続き、お互いがお互いを気に掛けるような共助のネットワークになっていく。）

別の例としては、子育て縁で、夏にサマーキャンプを開催。子育て縁の近くにあるブルーベリー農園を営むおばあちゃんのところに行った。初対面だったが非常に仲良くなった。子どもにとって、身近にブルーベリー園があったことへの驚き、また楽しい時間を過ごしたということをこどもが家に帰って家族に伝え、その後親御さんと子どもだけでブルーベリー農園を訪れた、ということがあった（子ども・こどもの親×地域・おばあちゃんとの関係形成に繋がった）。このように子育て縁という事業を必ずしも介さなくとも、地域住民が直接つながっているという状況を我々は目指している。

取組による変化

子育て縁は現状利用者の利用料、または事業の理念に共感していただいた方からの寄付金で運営している。

地域の人と人との繋がりのきっかけを提供することで、地域住民が独自の繋がりを形成し、自然と子育てに関して地域からの理解、地域としての協力体制の構築ができている。子育て縁は現状利用者の利用料、または寄付・自治体からの事業委託費（取組によって異なる）で運営している。相互扶助、共助という観点は捉え方を変えるとおせっかいの循環が地域で回っているという状態。子育て縁の事業も、人の思いが循環している状態で運営していきたい。おせっかいの想いから地域住民が寄付をもらい、その寄付金で事業を成り立たせたいと考えている。そのため、寄付事業が財源としてマッチしていくと考えており、ファンドレイジングも強化していきたい。Aさんのお金と一緒に思いもセットでＢさんにまわされていくという循環を目指している。

事例07 ハレルヤこども園（社会福祉法人ハレルヤ福祉会）

法人・事業概要

法人名 園名	ハレルヤこども園 （社会福祉法人ハレルヤ福祉会）
所在地	鹿児島県大島郡与論町茶花2002-1
特徴	＃ヨロン島まるごと園庭 ＃島の発展とリンク

Point

与論島にあるこども園。キリスト教的人間観と教育観に即した社会福祉の理念に基づき、自然、伝統文化、世界に目を向けた個性豊かな全人教育を特徴とする。与論島という魅力的な地域性や島の環境を活かしながら島の発展に寄与することや町では行き届かないことを意識した取り組みを実施。地域に根差した魅力あるオンリーワンの園づくりを目指している。教会の使命として「対象は全町民、全世界」と考え、在園児や卒園児のみならず、支援の必要な家庭にも寄り添っている。児童館、学童クラブ、心理相談室の併設、地域医療との連携等、地域づくりに貢献している。

法人概要・取組年表

1980年　ハレルヤこども園 設立

認定こども園　定員80名、現員91名

子育て支援センター、児童館、学童クラブ心理相談室等を併設。

協力事業所として、教会、有機農園、診療所があり、地域医療とも連携している。

背景・使っているリソース

「ほんもの」重視、子どもにとって必要なことはなんでも実施。

ニーズありき・制度ありきではない、こどもの育ちの環境として地域に必要なものを取り入れるというスタンスで長年取り組んできた。「地域にとってあった方がいいもの」は先だって取り入れるよう動いてきた。基本的なスタンスとして、本土との教育格差がないよう努めてきた。国や自治体の制度ができる前から必要なものは取り入れる。そのようなことを継続した結果、行政からの支援が伴ってきた。様々な新規事業に関して行政からの要請も度々あり、よい協力関係が築かれている。

子どもにとっての育ちを意識し、「ほんもの」を重視している。保育の質を上げるために、必要と思われる保育環境を整えている。子ども達が日常で「ほんもの」に触れることができるように、コレクションルームやアトリエ、キッズファームを備えている。　国の制度が整備される前から必要に応じて子どもの預りを実施してきた（延長保育・休日保育・お泊り保育・病児保育・障碍児保育）。それに伴い、ハレルヤこども園への入園を希望する家庭も増えていった。

地域との関わり

児童館、相談対応、農業体験、診療所など、保育のみにとらわれない事業を展開。

もともと教会が母体で、教会の使命として「対象は全町民」と考えており、家庭をまるごとケアすることは当然のことと考えてきた。

児童館、相談対応（相談室ノア）、農業体験など、保育のみにとらわれない事業を展開している。付帯施設ということで、男子寮、女子寮、職員住宅、診療所も導入している。地域医療とも連携し、医療面から必要な勉強会も継続的に行っている。現在は発達支援と放課後デイ、及び就労継続支援事業所の開設準備を行っている。

代々の土地にて農業法人を設立。園児たちと農業の真似事から始まり、現在は本格的な農園、食育を確立しようと取り組んでいる。（あらゆる保育業界の制度を網羅した後、こども教育の本質を考えるようになった結果、農業体験を重要コンテンツとして取り組みはじめた。）

国際交流にも注力している。ケニアのマサイ族教員をはじめ世界各地の方々との国際交流の実績を重ねている。

取組による変化

卒園児・家族との強いつながり。町や島視点でみた取り組みの一部として保育機能を提供。

子どもの成長にとって、地域コミュニティとの接点は必要不可欠である。その為、OB・OG他、地域の社協、老人福祉施設等との、地域交流が盛んに行われている。卒園後も運動会等に多くのOBやOGが参加している。

昆虫教室や天体観測を担っている講師は島外から移住されてきた方であり、保護者でもある。職員や地域の家族同士のつながりも深い。島全体が旅人や移住者を快く迎える雰囲気がある。

設立当時、保育園としての役割のみならず雇用先としての役割も担ってきた。地域がまだ貧しかった時代、子どもの大学進学は経済的に厳しい状況にあった。子どもの教育のため、今本当に島に必要な保育園（当時）をつくって、そこで就労してもらいたいという想いからの設立であった。今後の構想として、「ヨロン島まるごと園庭プロジェクト」にて、さらに保育の質をより高めていきたい。

事例08 地域子育て支援拠点事業（認定NPO法人びーのびーの）

法人・事業概要

法人名 施設名	認定NPO法人びーのびーの 港北区地域子育て支援拠点どろっぷ
所在地	神奈川県横浜市
特徴	＃多機能型支援、＃地域人材育成 ＃出産前の夫婦へのアプローチ

Point

認定NPOびーのびーのは、横浜市港北区で地域支援を行う団体。運営する拠点のひとつ港北区地域子育て支援拠点どろっぷは、一戸建ての専用施設で、1日約50~70組の親子の利用がある。ファミリー・サポート・センター事業（1か月約1,000件）や、利用者支援事業（相談件数1か月約40件）、一時預かり事業（1日3組）を実施する多機能型支援の場となっている。また、休日の両親教室を地域会場も含めて年間約60回開催するなど、妊娠期からの切れ目ない支援にも力を入れている。

支援活動ににあたっては、こどもにとって良質な環境の実現のために、親の子育て肯定感を高めるアプローチや、妊娠期から専門職や地域人材のサポートを気軽に誰もが活用できる体制の構築などを重視し、取り組んでいる。このアプローチによって、地域で子育てをする実感を得られる場となっている。

利用者支援事業や、ファミリー・サポート・センター事業により小学校まで支援の幅がひろがり、学童期・思春期まで見通せる場となっている。

法人概要・取組年表

2000年	NPO法人びーのびーの設立、おやこの広場びーのびーのを自主運営
2002年	「親と子のつどいの広場事業　おやこの広場びーのびーの」受託
2006年	「港北区地域子育て支援拠点どろっぷ」開所
2010年	ファミリー・サポート・センター事業事務局業務開始（どろっぷ内）
2016年	利用者支援事業事業開始（どろっぷ内）
2016年	「港北区地域子育て支援拠点サテライト」開所
2021年	一時預かり事業開始（どろっぷ・どろっぷサテライト内）

背景・使っているリソース

現代の子育て家庭に必要な子育て支援の在り方を追求

認定NPO法人びーのびーのでは、妊娠期からの切れ目ないプログラムを提供している。

現代は共働きの夫婦が多く、そのライフスタイルに合ったサポートが必要であること、またこどもにとって良質な環境を生むためには男性の参加しやすさ、子育て肯定感の充足が重要であることを前提とし、各プログラムを設計している。一例として、夜間や休日、オンラインでも受講できる両親学級を地域会場も含め年間約60回実施、産前の育児体験、情報交換の場の確保などを行っている。さらに港北区と協働で産前産後のサポートの状況やサービスの利用状況などを4カ月児健診時に毎年調査を行い、事業実施のための基礎データとしている。

また、両親教室、一時預かり事業、ファミリー・サポート・センター事業については、ネットで申し込みが可能となっており、利用者のアクセシビリティを高めている。

地域との関わり

企業との連携、地域人材の活用に期待

子育てを男女ともに担い、ウェルビーイングが保障される社会を実現するためには、働き方の改善が重要と考え、産休・育休のありかた、多様な就業・生活スタイルの補償について企業に知識普及、啓発していく取組を行っている。

子育てについては、産前産後のヘルパー導入に国庫補助がなく、横浜市独自の産前産後ヘルパー派遣事業に登録して活動している。今後は子育て支援を提供する専門職や、地域の支援人材（ファミリー・サポート・センター事業の提供会員、ヘルパー、ボランティア等）の確保を進めていく必要があると考えられる。そこで、学生や地域ボランティアを幅広く募集し、乳幼児にかかわる募集と育成を行っている。ボランティア募集のリーフレット「Doors」は、ボランティアの多様な受け入れの入り口として発行している。

また、夏休みに地域や学校と連携して行うボランティア活動の推進事業「ボラリーグ」、大学生や若者支援団体と連携して行うインターン受け入れ、プロボノ企業との協働、医学部や看護学科、保育学科等大学の実習などの受け入れを通じて、未来の専門職に門戸を開いている。

取組による変化

こどもが自発的に遊び・育ちあう環境が地域に

就園前の乳幼児期に、地域子育て支援拠点等の交流の場において、自然かつ自発的な遊び、育ち合いが保障され、親以外の大人とのかかわりが持てることで、自分の存在が社会から祝福されていると感じられること、体感できる環境を提供していくことが重要だと考えている。

見学者が驚くのは、どの子がどの親の子どもかわかない状況で、親も子も笑顔で過ごしている様子である。そこには親でなくても、親子の交流の場の中で、地域の中で、子どもたちが多様な他者とのかかわりの中で育っていく姿がある。

一時預かり事業やファミリー・サポート・センター事業による預かりが、通いなれた交流の場で実施されることで、親も子も安心して利用できるメリットもある。

事例09 まちの保育園/まちのこども園（ナチュラルスマイルジャパン株式会社）

法人・事業概要

法人名 園名	まちの保育園/まちのこども園 （ナチュラルスマイルジャパン株式会社）
所在地	東京都
特徴	＃まちのウェルビーイング拠点 ＃コミュニティコーディネーター

Point

都心部で6つの保育施設を運営。「まちぐるみでの保育」、「地域のウェルビーイング拠点になれる保育施設」を重視している。地域に開かれた場とするため、全園、施設に隣接した場所で、カフェや、地域の集会などに使えるスペースを運営している。

さらに特筆すべき事項として、こどもの興味・関心に寄り添いながら、地域とこども・保護者・保育者の橋渡しする役割を担う「コミュニティ・コーディネーター」を配置していることが挙げられる。地域の子育て世代や、その周りの人々につながりを作っていくことで、地域のリソース（人材、空き店舗、空き地など）を生かしたこどもの居場所づくり、ひいてはあらゆる年代の人が居場所を持ち、活躍できる地域づくりが実現している。

法人概要・取組年表

2011年	まちの保育園　小竹向原　開園
2012年	まちの保育園　六本木　開園
2014年	まちの保育園　吉祥寺　開園
2017年	まちのこども園代々木上原、 まちのこども園代々木公園　開園
2023年	まちの保育園 南青山　開園

背景・使っているリソース

園と地域をつなぐコミュニティコーディネーターが活躍

保護者だけでなく、地域住民の参画を得て、こどもの育ち、学びのための環境を作りだしている。

また、当園では、地域とこども・保護者・保育者の橋渡しする役割を担う人材であるコミュニティコーディネーターという役職を置いている。コミュニティコーディネーターを中心として、園と地域、それぞれの人と人をつなぐことで、地域の子育て世代や地域の人々に「共育て」のコミュニティが形成される。

こうしたコミュニティの活動により、例えば「みちあそび（道路や空き地を遊び場として一時的に活用する）」、閉店した店舗をこどもの居場所として活用するようなどのプロジェクトが生まれ、園の関係者だけでなく、地域の方々が参加している。

保育施設や学校には「こどもや子育て世代が集う」という性質ある。その性質を生かし、地域の人と人をつなぎ、そこで生み出される活動によってこどもの育つ環境の充実につながるという好循環が生まれている。

地域との関わり

こどもだけでなく、地域のすべての人のウェルビーイングに

現代において、子育て世代と地域の高齢世代、単身世帯等の間の交流は希薄化しがちである。高齢者等は町内会・自治会がつなげており、子育て世代は保育施設等や学校がつなげている傾向にある。

保育所等が中心になり、両者をつなげていくことにより、すべての世代を巻き込んだ交流が起き、高齢世代の孤立の解消、地域における役割を持つことによる充実、子育て世代にとっては子育てを見守り、応援してくれる地域の関係者の確保につながっている。

当園には、退職後の高齢者が保育施設にボランティア活動に来てくれている方がいる。ご本人にとってリタイア後の生きがいにつながっており、園としては子どもたちを見守る重要な支援者を得る形になっており、関係者すべてのウェルビーイングの実現につながっていると言える。

取組による変化

地域における「支援者」が続々登場

保育施設を地域に開くことを重視し、保護者だけでなく、地域に開いていった結果、当園の周りには、こどもをはじめとした誰もがウェルビーイングを感じられる地域づくりの関係者、支援者、が増加している。例えば、地域交流が進んだ結果、これまであまり接点のなかった地域の小学校の校長先生も、当園の取組みに賛同し、関与してくれるようになり、幼保小の接続や連携もスムーズになりつつある。

また、地域のことを自分事としてとらえ、活動する人が増加した結果、今後は、子育ての領域だけでなく、地域の課題解決やまちづくりへの取り組みも活発になり、まちの魅力向上にもつながっていくことが期待される。

事例10 和光保育園（社会福祉法人わこう村）

法人・事業概要

法人名 園名	和光保育園 （社会福祉法人わこう村）
所在地	千葉県　富津市
特徴	＃専門家で閉じない保育 ＃地域の人々を巻き込む

Point

和光保育園は「こどもと大人と保育者が、育ち合う・共育て・共育ちの共同体＝わこう村子ミュニティ」と称して、日々の保育に保護者や地域の人々を積極的に巻き込むスタイルで活動している。

こどもが生活者の一人として生命を輝かして生きることを大事にして、「ゆったりの時間とたっぷりの経験をこどもたちに」、「出会い、ふれあい、育ち合いの広場を大人たちに」を基本理念としている。その活動は、「母さんの会」「おやじの会」メンバーによる支援や、地域の人々の協力によって支えられている。こどもたちは豊かな生活体験を得、大人は役目を持ち、必要とされる充実感を感じられる、双方にっとって幸せなコミュニティが創りだされている。

法人概要・取組年表

1957年	和光保育園開園、認可取得
1995年	おやじの会　が自主結成される
1999年	学齢期の障害児土曜保育開始
1999年	地域子育て支援センター開設

保育園　定員　90名

背景・使っているリソース

保護者の力、地域の人、自然、なんでもリソースに

「保育園・幼稚園・こども園のスタッフはこども好きで世話好きなお人好しが集まるある種偏った人柄同士の集団」だと気付いた。保育についての専門知識はあるものの、自分たちにはできないことも多くあるのではないか？と考えたときに、それをカバーしてくれる存在として浮かんだのは保護者、地域の人であった。

こうした気づきから、わこう村では、保育を開いて積極的に保護者や地域の人々を園の活動に巻き込むようになっている。伝統行事に知識ある人、特技がある人、昔ながらの道具（例えば養蚕の道具、臼や杵）を持っている人、こどもの活動をサポートしたいと思ってくれる人すべての方々に支えられて日々の活動がなりたち、参加する大人たちにとっても、自己実現の場となっている。

また、自然に恵まれた立地にあることから、近隣の里山・里海、近所の人の畑なども、日ごろから活動のフィールドになっている。

地域との関わり

豊かな生活体験を実現するために汗をかき、知恵を貸してくれる地域の方々

当園では、保育の概念枠を崩したこどもと大人で営む「暮らし」を、重視しており、行事においても地域の人々の出番がある。柏餅を作るときは近所の家庭から柏葉を分けてもらい、お礼に柏餅をプレゼントする、蚕の餌にする桑の葉をもらう、正月飾りは近所の高齢者に来てもらって子どもたちも真似てつくる、など、地域の方たちの力が、こどもたちの豊かな生活体験の実現に自然と、かつ大きく関係している。

この他にもおやじの会の力により実現している環境づくりは多彩。特に代表的なものとしてあげられるのは毎年恒例夏のプール設置、熱中症対策としてのネット張り、虫取りをする裏山の草刈り、などである。

こうした行事は、それぞれの参加者が道具を持ち寄って、こどものために行ってくれている。

ログハウスの図書館、陶芸窯、コーヒーカウンターと子ども服のリユースショップを併設した大人のサロン「わいがや亭」（現在子育て支援センター「もうひとつのお家」の拠点としても利用）、富士見やぐらなどの設備も、「おやじの会（保護者に限らない）」による手作りであり、こどもと大人で「こんなことがしたい」を叶えてきた。

こどもの周辺で大人も参加・参画しながら、「里山手仕事民主主義」で混ざり合い、繋がり合い創りだす「村づくり」を現在進行形で取り組んでいる。

取組による変化

地域の様々な人と、頼り、頼られる関係に

保育を施設や専門家集団で閉じるのではなく、保護者や地域の人にも積極的に出番をお願い事をすることになったことで、保護者、保護者OBだけでなく、地域の高齢者、他の福祉施設（障害者施設等）の利用者など多様な人々と関わり、日々の活動を共有すること、が日常になった。また、地域の人々が参加し、助けていただくだけでなく、参加者の自己実現の場としても活動の幅が広がっている。

保護者や地域の方々の間でも、「私でも何かできそう」、「関わりたい」、「役割を持ててうれしい」と感じてもらえる雰囲気が作り出されつつあると感じている。

孤立が進みつつある現在において、こどもがかすがいとなり、多様な人々の居場所や役割、活躍する出番を作り出していくことに、子どもだけでなく大人たちにとっても顔が見えて幸せが実感できる「場」があることの重要性が増していくと考えられる。そういった地域コミュニティのつながりの核となる「保育」や「子育て支援」の在り方を模索し続けたいと考えている。